

第1回 SPARC Japan セミナー2015

「学術情報のあり方—人社系の研究評価を中心に—」

評価以前の問題： 人文学・社会科学とは何なのか

中尾 央

(山口大学国際総合科学部)

講演要旨

何かを評価しようとするならば、その対象を詳細かつ適切に把握した上で、その対象が向かうべき方向を見定めておく必要がある。では果たして、人文学・社会科学を評価しようという場合、われわれはこの対象の十分な理解を共有しているだろうか。そして、そのあるべき姿が見えているだろうか。本発表では、当たり前かもしれない以下の点を確認し、それをどう評価に反映させていくかを考察する。すなわち、人文学・社会科学はそもそも一元的に捉えられるものどころか、下手をすれば研究テーマや研究者毎によって多様な内容を持ったものであり、それはもしかすると自然科学にも同様に当てはまるかもしれない。もちろん多様だからといって「共通の評価は不可能である」などという短絡的な解決を推奨するわけではない。むしろ、多様性の中に共通の軸を見いだすことは十分可能である。しかしそれは、既存の分野を超えた所に見いだせるものなのであり、人社がどうこうといった狭い見方ではなく、分野にこだわらない広い視野を持たねば適切な評価は不可能なのである。



中尾 央

2015年より山口大学国際総合科学部助教。2010年京都大学大学院文学研究科単位取得退学（博士、2013年）。総合研究大学院大学助教を経て現職。専門は科学哲学（生物学・心理学・社会科学・人文学の哲学）・科学技術社会論。

今日はそもそも論として、研究者側も評価側ももっと頑張ったらいいのではないかという話をします。内容は主に3点あります（図1）。

1点目は、人文系といっても多様なものであり、「人文系」という一つのくりにするのはやめてもらいたいということです。

2点目は、今日の問題設定そのものを疑ってみてもいいのではないかということです。人文系の評価問題と言うけれども、それは理系の評価問題を飛ばしているだけであって、理系、人文系、社会系全ての評価問

題を一緒に考えなくては、評価問題は片付かないのではないかという話です。

3点目は、評価は誰がすべきなのかということです。研究者側は評価を嫌い、評価は評価側がやればいいとして評価者側に投げてしまっています。評価側も研究者側の研究の中身にあまり入らず、サイテーションの数や論文の数だけで評価しようとしています。それでは手抜き過ぎて、どの道、いい評価などできません。きちんとした評価がなければ学術はいい方向に進んでいかないので評価は重要ですが、本当に良い評価を目

指すという理想形を一度考えてみてもいいのではないかと思います。

人文系はそもそも多様なもの

私は科学哲学が専門なので、人文学に属していると思っています。社会科学については、野村先生から政治学を題材にお話しただけだと思うので飛ばします。では人文学とは何なのだろうかというそもそも論を考えてみたいと思います。

野家啓一さんという、東北大学副学長を務めた科学哲学の大御所は、「人文学の使命」として以下の三つを挙げています（図2）。（1）日常思考において自明視されてきた事柄をも問い直す「思索力・洞察力」。

（2）異質の他者の存在を受容し、理解し、共感しうる「想像力・感性」、（3）異質な声を聞き分けつつ他者に応答する「対話力」。

Take Home Message

(1) 人文系...がそもそも多様なもの

- ・色んなアプローチがあり、色んな評価軸を要する
- ・一部のアプローチは理系の一部と評価軸を共有するかも

(2) 人文系の評価問題...という問題設定も良くない

- ・結局学術全体の問題であって、人文系だけの問題にしてはいけない

(3) 評価は誰がすべきなのか

- ・評価を他人事・人任せにしない
- ・自分たちの実態をもっと積極的にどう評価して欲しいのか声を上げていくべき

15年9月28日月曜日

(図1)

多様な人文学・社会科学

- 人文学・社会科学とは何なのか
(社会科学は野村さんにお任せして...)
- 野家（2013）「人文学の使命：スローサイエンスの行方」
 - (1) 日常的思考において自明視されてきた事柄をも問い直す『思索力・洞察力』
 - (2) 異質の他者の存在を受容し、理解し、共感しうる『想像力・感性』、そして
 - (3) 異質な声を聞き分けつつ他者に応答する『対話力』

15年9月28日月曜日

(図2)

私はこれに賛同します。結構いいことを言っていると思うのです。しかし、これをどう実現していくかに関して、野家先生は少し見方が狭いのではないかと感じているのも事実です（図3）。例えば彼は、人文学において本が大事だということを強調します。基本的に人文学、社会科学は本を重視します。確かに言っていることは半分分かるのですが、本だけで測られるのはどうなのかという気もします。

さらに、彼は「人文学はスローサイエンスであって、自然科学のような早さを競うべきでない」ということも言います。これらが本当なのかどうかを考えながら、人文学は実は多様なのだということをお話しします。

人文学の使命（1）～（3）の、対話力、多様な価値観を共有するという事は確かに素晴らしいと思えますし、国の政策の基本計画にある程度載っていることかと思うので大丈夫だと思います。ただ問題は、それを実現していくために人文学はどういう姿であるべきかということだと思います。

例えば、使命（1）の、日常的に共有されている常識とは少し違った見方を提供しようとする「思索力・洞察力」は、確かに重要な人文学の役目だと思います（図4）。ただし、これは自然科学の役目でもあるのではないのでしょうか。それを考えたときに、では人文学は本当にスローであるべきか、あるいは本を重点的にやらなくては行けないのか。これはつまらないことかもしれないのですが、人文学の中で共有されているある種の価値観について、本当にそれが正しいのか

多様な人文学・社会科学

- 野家（2013）「人文学の使命」（続）

人文学の研究成果が論文の改訂を経て書物としてまとめられるまでには、通常二、三年を要する...人文学では論文は書物となる前段階、いわば『草稿』

人文学は、速度と効率を優先させる市場価値には還元できない別次元の価値が厳として存在することを、『スローサイエンス』の旗印のもとに積極的に言挙げすべき

15年9月28日月曜日

(図3)

うかを問わなくては、人文学のあるべき姿は見えてこないのです。あるべき姿が見えれば、それに即した何らかの評価基準ができるのではないかと思います。

例えば私の科学哲学の立場から言えば、本だけでなく論文も大事だと思います。自然科学の中では逆に論文が大事で、本なんて全然評価されないとよくいわれます。論文というのは一つの文化であって、そこに押し込めるのは面倒くさいことかもしれませんが、一つの価値を持っているはずなのです。逆に、自然科学の人に言いたいのは、論文だけではなく本も大事だという価値観を持っていいのではないかと思います。

人文学はスローであるべきかと問われたら、そんなことはない。一部の分野に関しては、むしろスローよりファストであった方がいいのではないかと思います。そのように考えていくと、人文学は単一のきれいなピクチャーが描けるものではなくて、いろいろな分野と共通しながら、多様なあり方が可能なのではないかと。しかも、それが人文学のあるべき姿なのではないかと思えます。

別の事例として、考古学も出してみます（図5）。考古学は人文学ではないと言う人はなかなかいないと思うので、人文学だと思います。例えば考古学で発掘調査報告書というのがあります。これは年間、数百冊出版され、累積で2~3万冊あります。発掘報告書はできる限り早く出した方がいいものが多いです。なぜなら、その報告書を出さなければ研究者がそれを利用できませんし、なおかつ、遺跡がなくなってしまうか

もしれないという危機に立たされているからです。結構早めに終わらせないといけないものが多数なのです。もちろん発掘報告書は、考古学においては大変重要な業績になります。このように考えると、人文学とはスローであるべき、本の方が大事だと単純には言えない、実態は多様なのではないかと思うのです。科学哲学を見ても、考古学を見てもそう思います。

分野を超えた評価軸

今日、そういうことを踏まえて言っておきたいのは、もう分野思考というくだらない考え方はやめてしまおうということです（図6）。人文学でも早くて、かついい仕事もたくさんあるのです。論文も、いい論文がたくさんあります。逆に言えば、自然科学だってスローでなければいけない仕事がたくさんあります。特にスローであるべき分野の一つとして、地球惑星科学の地震、火山、防災が挙げられます。最近、火山の話題がたくさん出ていますが、ああいうものはスローに知見を蓄積して、それを基にして何らかのモデルをつかっていかななくてはいけないのです。役に立たないから火山はやめてしまおうとやっていると、今のようなことになってしまいます。いろいろなデータを蓄積しながら、かつ社会にそれをどう伝えていくかをゆっくり考えていかななくてはいけません。それを考えていったら、自然科学の一つの代表的な分野の地球惑星科学だってスローであるべきだと言えらると思います。

生物学もそうだと思います。iPSは競争になってい

多様な人文学・社会科学

- 半分くらいは同意、残り半分は大分微妙。
 - ・ 使命 (1) とかスローサインエンスである「べき」か？
 - ・ あとは人文学の捉え方が極狭な気が
- たとえば私（科学哲学）のやっていること（私が人文学かどうかのささげかわからないが）
 - ・ 論文は本の草稿か？
 - いやいやいやいや、論文だってそれなりに大事。
 - ・ スローである「べき」か？
 - いや別に早くできたらそれはそれで良いのでは、

15年9月28日 片岡日

(図 4)

多様な人文学・社会科学

- 別の事例として：考古学
 - ・ 発掘調査報告書だって凄く重要だし、発掘はそんなにスローにやってはられないものではない
 - むしろ結構早めに終わらせないといけないものも多数
- 以上踏まえると：
 - ・ 野家のイメージする人文学はスローである「べき」なのかもしれないが、実態はどう見てもそんな単純なものではない。
 - じゃあ実態はどうなのか？

15年9月28日 片岡日

(図 5)

て、ファストの典型例に思えるかもしれませんが、幹細胞研究は数十年、下手したら100年以上の歴史があるかもしれない分野です。かなりの時間を蓄積してスローに行われてきた分野だと思います。ですから、自然科学はファストか、ファストであっていいのか、さらにファストであるべきかと言われたら、そうも言えないのではないのでしょうか。そうではない分野もたくさんあるはずですよ。そう考えたら、人文学と近いところがたくさんあります。それを踏まえたら、評価問題を人文学だけにしたら、理系の人は逆にかわいそうなのではないかと思えます。

しかも、防災・地震・火山といった研究は社会との接点もありますし、人文学・社会科学・自然科学の境界はすごく曖昧になってきていると思えます（図7）。それを踏まえると、そもそも人文学はどう、社会科学はどうという捉え方ではいけないのではないかと、今日のテーマをぶち壊すような、そもそも論を展開してみました。

自然科学は、インパクトファクター、サイテーション数が大事なのは分かりますが、それだけで測っていいはずがありません。人文系・社会科学系の評価問題を勝手に自然科学に持っていくぐらいの勢いがないと、評価問題は解決しないような気がします。自然科学も、理論系、実験系、記載系、いろいろなタイプの問題意識や研究のスタイルがあると思えます。記載系は論文が膨大に出ます。逆に理論系は数年に一度という人もいます。こんな当たり前のことを踏まえれば、

自然科学だっていろいろな評価軸が必要で、人文科学・社会科学の評価問題は自然科学にはほぼそのまま当てはまってしまうかもしれないのです。それがこの問題のあるべき姿の一つなのではないかと思えます。これは、こういうことを科学哲学ももっとやって、科学哲学業界も変わったらいいのではないかという、われわれへの自制でもあります。

評価は誰がすべきか

評価は他人事ではありません（図8）。これは研究者側、あるいは、今日たくさんおられる評価側の方々へのメッセージです。研究内容は研究者側がやればいい、評価は評価側がやればいいという分業が行き過ぎしており、それが評価の問題を根深くしてしまっているのではないのでしょうか。例えば、永崎さんにご指摘いただいたのですが、人文系で参考文献を明記しない論

分野を超えた評価軸

- 多様な基準は人文・社会科学だけでなく、自然科学でも
 - ・ 色んな研究のあり方があるという当然のことを、そろそろ分野を超えて共有すべきでは
 - 理論系、実験系、記載系、...etc.
 - 人文・社会科学の評価問題は翻って自然科学、学術全体の評価問題でもある
 - 科学哲学ってこういうこともっとやっても良いと思う

(図7)

分野を超えた評価軸

- 分野思考はもうやめよう
 - ・ 人文学でも早くでいい仕事もたくさんある
 - ・ 自然科学だってスローであるべき仕事はたくさんある
例：地球惑星科学（の一部）、生物学（の一部）、
あとは教育だってそう早くできるもんじゃない
 - ・ しかも人文学・社会科学・自然科学の境界さえ色々曖昧になりつつある
→ 分野思考の崩壊

(図6)

評価を他人事にしない

- 最後に：評価は他人事ではない
 - ・ 数で評価するのはもちろん大事
→ 数にできるものはすべき：どう数にしていくか
 - ・ 数に現れないものをどう評価するのが問題
→ どうすればいいか
 - ・ 多様な評価基準を設定していくため、多様な研究者の参画が必要になるかも
→ 研究者は評価を（完全な）他人任せにしない
→ 年長研究者だけでなく、若手の役割も
→ 評価側ももっと研究者側に寄り添っていくべきでは

(図8)

文がたくさんあるということです。それは確かに文化の一つだと思いますが、分野外の人が見たらどう思うでしょうか。分野外に対する説明責任を考えたら、できることはやっていいのではないかと、つまり、数で表せるものは表してもいいのではないかと思います。

考古学でも実はあるのです。発掘報告書はPDFになっていません。奈良文化財研究所で1万数千冊がようやくPDF化されたぐらいです。残り1~2万冊は全くPDF化されていません。数にできるものを数にする、PDF化する、オンライン化するということは、とても単純なことです。人文系だって、できるのだったら、そういった当たり前のことをどんどんやっていいのではないのでしょうか。それを第一に研究者側に訴えてもいいのではないかと思います。

数だけで評価できる問題ではありません。これは自然科学研究者に言えることなのではないかと思います。数に表れないものをどう評価するかというのは、人文系・社会系では当然言われてきたことなのですが、それを逆に自然科学研究者にも言っているのではないかと、そういうものをどんどん評価していくような評価軸、評価基準を考えた方がいいのではないかと思います。

そういうことを言うと、研究者は面倒くさいと言うでしょうし、評価側は何で研究の中身まで入っていかねばいけないのだという話になるかもしれません。そうしたら一緒にやればいけないかと僕は楽観的に思ってしまうのです。多様な分野ごとに異なる評価軸を設定するために、研究者側が評価側に「私こういう研究をしていて、こういうところを評価してほしい」と言っていた方がいいと思いますし、評価側はそういうことを知ろうとしていってもいいのではないかと思います。

なおかつ、年長研究者ばかりに任せておくと大変なことになってしまうので、「若手研究者は研究が大事だからそんなことは考えなくていい」と言われますが、そんなことは全然なく、むしろ若手研究者もこういうことに積極的に関わっていいのではないのでしょうか。それが自分たちの分野の将来を決めるからです。

評価側と研究側がもっと寄り添って、お互いに情報交換、インタラクションしながら、評価を考えていていいのではないかと、むしろそうあるべきなのではないかということです。

最後に

言いたいことはこの三つです(図9)。そもそも人文系とは何だろう。その問いには、なかなか単一の答えは与えられません。しかも、人文系は多様です。それは自然科学も同じです。人文系、社会系、自然科学系、そんな区別にこだわってはいけなくて、各分野が多様であるのではないのでしょうか。つまり、今回の評価問題は、人文系、社会系ではなく、自然科学系、あるいは学術全体の問題であるということです。それを踏まえて、多様な分野、学術全体を評価していくに当たっては、理想かもしれませんが、評価側と研究者側がもっと情報交換、インタラクションしながら評価軸を設定していくことです。しかも、年長研究者、引退した研究者だけではなくて、若手研究者も積極的に発言していったらいいのではないかと思います。その例として僕は今日ここで若手ながら評価問題のお話をさせていただきました。

●フロア1 独立行政法人の教員です。1点目に、人文系も評価しなければいけないと言うけれど、評価に

Take Home Message

- (1) 人文系...がそもそも多様なもの
 - ・色んなアプローチがあり、色んな評価軸を要する
 - ・一部のアプローチは理系の一部と評価軸を共有するかも
- (2) 人文系の評価問題...という問題設定も良くない
 - ・結局学術全体の問題であって、人文系だけの問題にしてはいけない
- (3) 評価は誰がするべきなのか
 - ・評価を他人事・人任せにしない
 - ・自分たちの実態をもっと積極的にどう評価して欲しいのか声を上げていくべき

15年9月28日 片岡 日

(図9)

ついてうるさくなってくる前に、あるいはなつた後即座に対応できなかったのだから、もう諦めるべきではないか、今さら遅いという状況判断は正しいですか、間違っていますか。

2点目に、科学哲学というのは人文系でも自然科学系でもなくて、一番不要な学問ではないかと思うのですが、そういう言い方をされた場合にはどう答えるのでしょうか。

●中尾 まさに予想していたとおりの質問をありがとうございます。1点目に関しては、諦めたい人は諦めてくださって結構ですが、われわれは諦めたくはありません。世代が違うから、われわれ若手はもう少し頑張ってもいいのではないかと、少なくとも僕はそう思っています。諦めるか、諦めないかは、学術全体で考えたときに、後で佐藤先生から発表があると思います。イギリスの事例を参考にすればできなくはないのではないかと夢ながら思っています。

2点目に関しては、僕自身は科学哲学という分野、研究内容自体はなくてもいいのではないかとずっと言い続けているのですが、何らかの形で科学哲学のような人たちにやってほしいと言われる仕事は幾つかあるので、それを少なくともやっていってもいいのではないかなと思っています。

●佐藤 スローな部分があってもいいのではないかとするのは僕も大賛成です。僕も10年一仕事で、どうなるのか分からないところで10年に1冊ぐらい本を書いてきました。イギリスのことを調べていて、若干考え方が変わってきました。イギリスでは、「定年までにもすごい名作を書いて、みんなをびっくりさせてやる」と言って、ずるずる60歳、70歳までいて、結局何も出せなかったという人が、研究評価制度が1980年代半ばに始まる前はたくさんいたそうです。イギリスの場合は5年か6年のスパンでリサーチアセスメントされるのですが、それによって結構サイクルが早くなりました。

日本ではよく、先生が教科書を書いて、ブックチャプターを研究者に書かせて、それが業績になっていき、講師、准教授、教授と上がってきたという厳然たる事実があるのです。私も途中まではそういうルールของเกมの中で、ある程度キャリアアップしてきました。スローといっても、やはり限度があると思います。その反面、例えば青色発光ダイオードでノーベル賞を受賞した名城大の赤崎先生は6年間何も出せなかったということを書き『青い光に魅せられて』で読み、僕はものすごく心を強くしたのです。理系でもそういうことはあり得ていいと思います。それから、イギリスなどを調べていて、例えば数学で1本何百ページの論文をどうやって評価するのかと聞くと、「分からん。数学のパネルメンバーに聞いてくれ」と言われました。

個人的なご意見で結構ですが、本当に怠けて、63歳とか65歳までいる人たちがかなりのパーセントいるわけです。その反面、6年間何も出せないで、ノーベル賞を取る人もいます。しかし、99%はサイクルでやっていった方がいい、本当の天才というのは放っておいても出てくると思います。その点を中尾先生ご自身はどうお考えになっていらっしゃるか、何かその解決策があるならぜひ伺いたいと思います。

●中尾 個人的には、10年かからなければできない仕事は確かにあるとは思いますが、10年かけて出す仕事までの10年間はそれなりにマイナスの評価をされてもいいと思います。ただし、10年後に出た仕事でそれを覆すだけの大きい仕事であれば十分回復できます。つまり、研究は基本的にばくちだと思っています。そういう感じでいけば、別に20年選手、30年選手がいてもいいのではないかと思います。ただし、その方は成果を出すまで我慢してくださいと。その道を選びたい人は選ぶと思います。僕もそれでいいと思っています。